

ヌース素描

——晩年のプラトンが愛用した一用語の研究——

一、序

二、一般的用法の調査

A、例示

a、主に認識の現実態の側面を指す例

b、主に認識の可能態の側面を指す例

B、総覧

三、主題的用法の調査

A、総称語として

B、特称語として

a、認識欲の最高段階を指す例

b、満ち足りた認識の最高段階を指す例

四、まとめ

A、調査一覧

B、ヌース素描

C、備考・提案

長 坂 公 一

一般に心理現象を指す言葉は、心理現象というのがもともと極めて個人的なものだけに、他の言葉と違ってなかなか意志を疎通しにくいものであるが、プラトン思想の源泉ともいふべき或る特殊な内体験を秘めてもいるかと疑われるヌース^{註1} (nous) の如き言葉においては殊にそうであつて、それは誰しもとりわけ追体験的にその真意に迫りたいと願う言葉でありながら、疎通の困難どころか、そこへはいかなる安直な近道も誤解の危惧なしには通じていない。それについて原典に示された形式的な定義をそのまま直訳するだけといふことの、有害無益はいわずもがなである。

そこでヌースの意味を充分に理解するために当然考えられるのは、間接の方法である。追体験をめざすからにはむしろまずわれわれの理解しうる基準を用いねばならない。そしてそれに照らしてこの言葉ヌースが実際に活用されている文脈を分析し、この言葉のもとに認められるかぎりの徴表を種々雑多に集め、それを取捨選択しながらプラトンが意図していたものを再構成していくのである。^{註2}

われわれは以下に、プラトンにおけるヌースの意味のそのような再構成を試みたい。ただし目標は素描のみである。いうまでもなく再構成である以上、われわれはその大凡の素描だけで満足せねばならない。誤謬を犯し易い定義や人を欺く直訳は差し控えねばならない。われわれ他人がプラトン個人の内心にだけあつたものを、一滴も漏らさず汲みつくすというわけにはいかないからである。

調査の範囲には主にプラトン晩年の作ビレボス篇をとりたい。この種の調査は、語義変遷史というもつと広範囲な研究のためのいわば下請作業として、資料提供の任務を持つものである。資料としては、むろん多少とも網羅的に完結しているものが望ましい。そしてわれわれにとってさしずめそれを期待しうる手頃な範囲は、心理現象を指す言葉、殊にヌース系の言葉についてプラトンの全対話篇中（国家篇や法律篇は一卷毎を一篇とみなして）最も多量の用

例を含むこの対話篇一篇なのである。^{註3}

また調査順序は常軌に従い、まず言葉の一般的な用法、すなわち慣用句をなし或いはさほど話題に左右されない地の文の中で様々な登場人物によって自由に使われているヌースからはじめて、専門的な用法、すなわちテーマ如何によって頻出し或いは顔出ししなくなるヌースへと進めていきたい。幸いプラトンの対話篇においては、前者は彼の生涯を通じてむらなくみられ、後者は主題に応じて初期に少く後期に多いものであるが、ともあれ明瞭に区別されうる。^{註4}そしてその後でこれら両者を併せて比較調整しながら結論へ持っていくたい。

二 一般的用法の調査

A、例示

ここでは特に慣用句を重視したい。言葉の中でも慣用句は、それが慣例になるほど頻繁に且つ多方面の人々によって使われた結果のものである。従ってある言葉が一般人の間でどのように受けとられているかを、最も効果的につきとめるためには、なかならずその言葉を含む慣用句に注目すべきであろう。

ヌースを含む慣用句の筆頭は「ヌースを持つ *vous echein*」の類である。ギリシャ人達にとって知識知力の類は、日本語で「力持ち」といわれる力のように、さしずめ「持たれるもの」なのであって、ヌースの場合には格別それが著しい。^{註5}次に著しい慣用句は「企てる *egchein*」「得心がいへんに *kathevous tin*」「注意を払う *vous ephroschein*」などだろう。ピレポス篇でも以上のうち「企てる」の外はどれも使われているので、われわれもまずこれらを中心に問題点を探ってみよう。

a、主に認識の現実態的側面を指す例

慣用句の最初の例は巻頭のソクラテスの言葉である。——「では、はっきりさせておきたまえプロータルコス君、

いま君がピレーボス君から継承しようとしている主張はどんなものなのか、またぼくらの側からの主張は、もし得心がいかなければ *ēdu jn̄ ou krecē vōu n̄ kyōianos* これに異論をはさもうという君の構えだけれども、そもそもどんなものなのか。それともひとつ、双方を要約してみたものだろうか (Phil. 1:11~12)」。——問題の箇所をもっと直訳体に伸ばせば、「ぼくらの側から出される主張が、君にとってヌースに即していない場合には」となる。

さてこれを様々なテストパターンに掛けながら目に立つ徴表を摘発してみよう (上記41頁6—9行参照)

(1) まずこのヌースはプロタルコスに所属するものとされている。^{註6}——(2) 得心の対象はソクラテスの側からの主張、つまりつづいて示された要約によれば、「分別 *spōnēn*」^{フロネシ} 知性 *noēn*」^{ノエ} 記憶 *memōria* 等々が人間の持ちうる最善のものだ」という主張である (cf. 11:7~12, 19:26~27, etc.)。いうまでもなくかかる対象は、一瞬毎に遠ざかって考えられなくなるとか、プロタルコスが向きを変えれば見えなくなるとかいった類のものではない。だから知覚の直接の対象のような徹底した意味での個別者ではない。^{註7}とはいえ分別^{フロネシ}知性^{ノエ}等々の言葉によって指されているのはそれぞれの心理状態^{ヘウシス・アエトキス} (11:4 *ēs psychēs kai sōthōs*, cf. 32:2) であり、心理状態なるものは、本論冒頭にも認めておいた通り、場合によっては甚だ個人的特殊的たりうるものである。プロタルコスにしても彼個人の内体験について、「この心理状態は最善であるか否か」等々の如き個別的な問題を、彼のヌースに照らして内省するということはありうる。従ってもしそうであれば、このヌースの対象はふつうの普遍者のみには必らずしもかざられない。かなり個別的であってもただ空間に縛られず^{註8} 表象^{アエトキス}されるものでさえあれば、ヌースの対象たることは可能であると考えられる。他方またこのヌースの対象は、善か否かを問われている以上、価値的对象ともみなされているのであり、またその中に含まれている知性^{ノエ}は、このヌースにとっては対象化された自己、つまり広義の自己である。^{註9}——(3) ところでプロタルコスがソクラテスの説明を聞きつつ、その真偽正誤を逐次判別していく心理過程は、自明の通りかなり長く複雑なものである。しかしここではそれがヌース一語で表わされている。さればこの言葉は、比較、分析、総合、推

理など種々の心理作用を、またかなり具体的な対象に関わる作用までもあるとすれば、抽象作用でさえない単なる直知の作用をも併せて、総称的に指しているのでなければならぬ。ただしこれは慣用語である。従って一応われわれには多種の作用の総称とみえるこの言葉も、これを使ったギリシャ人一般の意識では、むしろ一群の心理作用を分類しないままで、全体的に指す言葉であったと解釈するのが自然かもしれない。とすれば慣用語ヌースが直接に指しているのは、推理、判断、直知等々のどれか一つなのではなく、むしろもっと単純にみられたかぎりの全体であろう。そしてかかる全体のうち彼等が認めていたはずの一定な性格こそ、このヌースの基本的な意味なのだろう。例えばそれは、「単純知覚の如く時空にかざられたものでなく、もっと持続性のある認識作用」とでもいうべきものかもしれない。^{註10}

(4) ところでまたプロタルコス^{註10}は、ソクラテスの主張を自ら評定するのだから、少くともその判断の基準だけは前もって自らのヌースの側に知っていたのでなければならぬ。つまりこのヌースは、作用以前にも完全に無知無内容だったのではないのである。そこでいまアリストテレスに従って、未だ知らぬけれどもいざれ知りうるという可能状態に対して、既に知った状態を第一次現実態と呼び、更にこの得られた知識を随時に思い浮べう、という可能状態に対して、現に思い浮べている状態を第二次現実態と呼ぶならば、^{註11}このヌースは作用に際しては二重の意味で現実態にあるといえるだろう。——(5) またこのようなヌースの働きには、さしあたり感覚器官は不要である(上記②参照)。

(6) そしてまた、一応は判断の基準を含みながらも他方では依然として問答の余地を残しているようなこのヌースは、その信憑性も相対的なものとされているのである。^{註12}——(7) しかし他の言葉との使い分けはここではわからない。

b、主に認識の可能態的側面を指す例

ピレボス篇の発端は周知のとおり、「人間の持ちうる最善のものは何か(Pl. 106b)」という問に対してピレボスが快樂^{レクテ} *tyche* の類をもって答え、ソクラテスが分別^{プロネシス} *sophrosyne*、知性^{ヌース}の類をもって答えたことであつた。しかるにおよそ最善なものは、形式的にみても優先性^{プロテクトン} *attractio*、自足性^{アウタリクテヤ} *autarkheia*、充足性^{ヒカレン} *hikanon*、完全性^{テレオン} *teleon* を兼備すべきも

のであるのに (cf. 20 c 8~d 11, 60 b 10~c 5, 64 e 5~8, 66 b 1~c)。知性や快樂は、単独ではそれらの全てを持ち合わせてはいない。だからむしろ正しくは、「知性、快樂を併せ含むことよって全ての必要条件を備えたいわば合成的な生活の *pleure's* *Bios*こそ、それである」と答えるべきだったのである (cf. 22 a 1~2, c 6, d 6, etc.)。そこで、この合成的生活の実質は如何、またその要素たるかぎりでの快樂と知性との優劣は如何という二つの問題が、ピレボス篇全体のライトモチーフとして現われる。そして以上がピレボス篇のいわば第一部なのである (II a 1~23 b 10)。ところで最善のものたる合成的生活の実質を問うには、そのものはまだ現実存在ではないので、まずそれを論議のうちに理想像として構成してみねばならなかった (cf. 59 e 2~3, etc.)。そこでかかる構成が論議のうちに実施される。そしてその部分をピレボス篇の第四部とすれば (59 d 10~巻末 67 b 13)、合成のための素材を調達する論議過程が第三部であり (31 b 2~59 d 9)、前もって合成のプランを組む過程が第二部をなすといえるだろう (23 c 1~31 b)。われわれがヌース慣用語の第二例としてとりあげるのは、いまのいわゆる第三部に移ってほどなくソクラテスの口の上るものなのである。

これに先立つ第二部において示された合成プランは、知性、快樂両々相待つ合成的生活のためのみならず、もっと広く、秩序ある宇宙をはじめおよそこの世のあらゆる善き存在物に関わるものだった。すなわちこれらはいずれも欠度 *κρείσσον*、限度 *πέρας*、合成因 *αίτια* の三要素から成る合成体 *μετέχον* であり (下註 30 参照)、この合成において快樂は欠度の種族に所屬し、知性や分別は合成因の種族に含まれるというのである。しかし理想的な生活の建設にあたっては、いうまでもなく全ての快樂をみさかきもなく取り込むわけにはいかない。あらかじめ素材たる快樂を分類選考しておかねばならない (cf. 61 d 1~64 a 6, 13 b, 28a, etc.)。そしてこの分類の行われる論議過程がいわゆる第三部なのである。ただし分類だけであって、まだ選考ではない。ソクラテスはここでまず「消耗の恢復に伴う」類の快樂をとりあげる (31 b 6~32 b 8)。——「ではもう、できるかぎり注意を払って、もらわねばならない *τὸν νόον δεῖν ἰκρίωνται*」の *πρόσεξε*。「はう、どうぞ」。「それではいよいよ、およそ生物のうちに調和の崩れていくのが認められるときには、

それ本来の状態の崩壊と苦痛^{リユムペ}の発生とが、そのとき同時に起っているのである。「いかにもそうでしょう。」「しかし反対に、それが調和を恢復しそれ本来の状態へと帰っていくときには、快樂^{ヘイラク}が生じるといわねばならない (S. 1170)。
……」。——これもまた四角四面に直訳すれば、「できるかぎりヌースを何々に向けて持つ」となるだろう。

そこでこれについて、前の例にみられなかったような新規な徴表があるかどうか考えてみる。

(1) このヌースの所屬は前例に同じである。——(2) しかし対象はもはやヌース自身を含まず他者であり、価値対象でもなくむしろ自然科学の対象の如く没価値的である。——(3)(4) またここで特に注目すべきは、「できるかぎり」という修飾句である。ここではヌースの作用ないしは状態に程度差が認められているのである。またこのヌースは、相手が語る以前から待ち構えているものとしては、可能態の側面を表に現わしているともいえるし、また努力次第で作用、状態の程度を高めうるものならば、認識欲を含んでいともいえるだろう。——(5) 身体との關係は前例に同じ。——(6) 真偽については、作用、状態に程度差が認められている以上、信憑性にも程度差が認められているわけである。——(7) 他の言葉との使い分けは、ここでも分明ではない。

B、総覽

調査はこのようにいたって簡単なのである。だから一般用法に関しては、以下総括的に若干目ぼしい点を紹介するだけで充分であろう。より詳しくは註17をみられたい。

(1) まずヌースの所屬については、主題的用法を俟つまでもなく一般的用法においても、「神のヌース」対「私のヌース」なる対比のもとに (22 e. 3. cf. 22 c. 5 ~ 6) 、「また「ヌースの片鱗さえ持たぬ小児ら」なる表現のもとに (66d) 、「誰の持つべきものかはかなり明確に意識されている。つまりふつうは賢者のものなのである。——(2) 次に対象については、かの善き存在の一要素たる欠度^{フズイロ}の種族を説明した箇所、「より暖くなりつつあるもの」の如き欠度者^{フズイロ}について、「そこに或る種の限度^{フズイロ}をみつつける、*ποσει* ことができるかどうか、考えてみたまえ、…… (94 a 7 ff.)」といわれ

ている。いうまでもなくこの場合の *voce* (ヌース) は、欠度者^{アズイロ}を継続的に眺めながら、しかもその欠度者^{アズイロ}が或る限度、理想的温度を、単に或る瞬間に通過するか否かではなく、幾分でも持続的にその温度を保持しつづけるか否かを見定めようと構えているのである。従つてこのヌースの対象は、まずは持続的な存在であるといえるだろう。——(3) 作用については下記(7)をみられたい。——(4) しかし「企てる」の意味のヌースについては、ピレボス篇に用例はいけれども、こゝらで一言を要するであろう。ソクラテスに帰されている有名なパラドックスに、「何人も悪を悪と知りつつ求める者はいない」というのがある。これはプリミティブな思惟において「悪と知ること」すなわち「厭うこと」、「善と知ること」、すなわち「求めること」というふうには、「認識」と「実践欲」とが未分混同されていたことを示す例と解釈されている。^{註15}そこでヌースについてもこのような混同があったと想定すれば、すでにホメロスにおいて「知る」から「企てる」への移行が認められることも(上註1)、当然の結果として理解されるし、後の慣用句「企てる *eu pneigyeu*」なども、そういう古い思惟形式の残映として了解されるだろう。——(5) 身体との関係や、(6) 真偽については異例はない。——(7) しかし区別に関しては、いま引用したばかりの「みつける *voce*」ことができるかどうか考えて *skolein, opai* みたまえ」の如き用例に注目すべきであろう。ものを認識するまでの過程を懷疑、探究、発見の三段階に分けてよいならば、ヌースはむしろ発見の段階を指し、考察 *skolein* や探究 *kyria agn* などとは使い分けられているのである。^{註16}

一般用例に認められる顕著な徴表についてはこれくらいにしておく。^{註17} けだし相互の調整などは後程に改めて考察するべき問題である。

三 主題的用法の調査

ピレボス篇ではヌースに関わるものとして「人間の持ちうる最善のものへの間 (cf. *logos, etc.*)」「知性^{ノイノス}と快樂^{ヘドネ}との

優劣問題 (cf. 22 d 4 ff. etc.) 「最善の存在の構造分析 (cf. 23 c 1-31 b 1)」「知的機能の分析 (cf. 55 c 4-59 d 9)」などの主題が認められる。いまこれらの主題を論じるために要請される用語としてのヌース、ノエインの全てを主題的用法の名のもとに一括すれば、既に入註 3 4 に示した通り、ヌース 48 語、ノエイン 4 語が得られる。これが以下の研究对象である。まず言葉の使い分けについて全般的に認められる事実から述べよう。

話の発端に帰るとソクラテスの主張は、善と快とについて、それらは名目が二つである通り、実在としても一つではなく相互に異なった本質を持つものであり、しかも快樂よりもプロネーシスの方がより多く善の分に与つていふというのであった (cf. 60 d 7-5, 11 b, 19 c-d, etc.)。ところでここに挙げられるプロネーシスとは、一つの総称なのであり、それは知性、知識、*επιστήμη*、機智 *σοφία*、術知 *τέχνη* 等々いわば一定の特徴を共有して類をなしていると思われる相当多数の心理状態を指しているのである。この点はピレボスの挙げたヘードネー *ἡδονή* についても同様である。そこでもいまプロネーシスによって総称される一群の心理状態を仮りにプロネーシス族 (*γενος*, cf. 63 b 8, c 1 と名付け、ヘードネーによって総称される一群をヘードネー族と名付けておこう。問題はまずプロネーシス族とヌースとの関係である。

ピレボス篇にはこのプロネーシス族をほぼ全体的に指す表現が四通りある。一つは、この一族に所属するものの若干を、例えば「知性、記憶 *θυμή*、知 *ἐπιστήμη*、真なる臆見 *σοφία ἀληθής* (21 b 6-7)」あるいは「記憶、分別、知 *θυμή*、真なる臆見 (20 b 4 c)」の如く列挙する仕方であり、他の三通りは、プロネーシス、ヌース、エピステメーがそれぞれ単独で全体を代表する場合である。ただしこのうちエピステメーの場合が比較的稀れなのにひきかえ、殆ど全てはプロネーシスとヌースの用例である。列挙体の中にもこの両語の少くとも一方は必ず含まれている。^{註18}

ところで一般的に総称語 *κοινόν* *βοῦλον* を、北天の一星座と山中の一獣とが「大熊」と総称される場合の「大熊」の如き同音異義語 *ὁμοῦνον* と、犬や猿が「動物」と総称される場合の「動物」の如き同音類義語 (このうちに同音

同義語 *συνώνυμοι*、狭義の同音類義語 *τά πρὸς ἐν λέξιμα, τὰ τῶ ἐπέσης λέξιμα* などを含めたい)とに大別しうるならば、いまの場合のプロネーシスやヌースはいうまでもなく後者であろう。それらはプロネーシス族の各成員に共通な何ものか *κῶνεται* を、少くとも或る心理状態 *ἐπιθυμία (Thymia etc.)* を指していると考えられる。従ってこの共通なもの何たるかをつきとめることは、ヌースと呼ばれる心理状態の実相に触れるための重要な一步となるだろう。しかし他方、犬や猿を「動物」と呼び、植物、野獸、人間などを「魂あるもの」と呼ぶ場合の「動物」や「魂あるもの」は、かく呼ばれるものの各個に共通な性質、すなわち類を指す類名称なのであるが、プロネーシスやヌースは、先にみた列挙体の中でその一項をなしていたことから自明な通り、それぞれ或る特殊な心理状態をも指しうるのであって、もともと類名称ではなかったものとも考えられる。因みに単なる一員に過ぎないものの呼称が類全体の総称となるのは一種の提喻法 *synecdoche* であって、例えば個人名のクロイソスが全ての金持ち達の代名詞である場合のように、決して珍らしくないものなのである。とすればプロネーシスやヌースは、総称語としてはともかく、特称語としてはなお記憶、技術、知識等々に含まれない独特の種差をも指しているはずなのであって、従ってわれわれの目的のためにはこの種差をもつきとめねばならない。

A、まず総称語としてのヌースについて、そこに総称的に指されているはずの共通者を訊ねてみよう。

ソクラテスは最善の生活が分別、快樂兩々相待った合成的生活であるにひきかえ、プロネーシス族の一切を欠いた快樂一辺倒の生活がいかに味気ないものであるかを論じながら、次のように語っている。——「もしも君が知性や記憶や知識や真なる臆見を持っていないなら、君はまず第一に君自身が享樂しているのかいないのかさえ気附かないに違いない、そもそも君にはあらゆる種類のプロネーシスが欠けているわけだから (ἀπορροή)」。——ここでは明らかに、知性をはじめかの一族の成員各個がいずれもプロネーシスと呼ばれているのである。のみならずこの箇所いわゆるとすることは、一つには快樂がプロネーシス族なしにはありえず、結局プロネーシスの一段階でしかないという

ことなのである。快樂が快樂たりうるのは、いくら仄かにでもあれともかく感じられ意識さればこそなのであって、全き無意識裡に生じる身体上の変化 *habes* (cf. *god*) などとはむしろ快樂ではない。すなわち快樂は意識の一段階であり、従ってまた快樂に不可欠なものを指す総称語プロネーシスは、まさにこの「意識一般」を指していたのでなければならぬ。またさればこそ知性、知識、真なる臆見、記憶などがいずれもプロネーシスと呼ばれたのも当然のことと理解される。つまり意識一般がそれらのいわば共通性質だったからである。

ところで言葉ヌースによって特称的に指されるものが、またプロネーシスとも呼ばれ、少くとも意識の一段階であるのはよいとしても、問題はこの同じ言葉ヌースが総称語として用いられた場合に、総称語プロネーシスのように意識一般を指しうるか否かである。そしてこれに対しては、われわれは否と答えるのが正しいと考えたい。言葉ヌースが快樂にまで述語づけられるような例は、少くともアリストテレス以前については考えられないようである。因みにホメロスでも単純知覚がヌースと呼ばれる例はなかった。快樂、単純知覚ばかりか、記憶、臆見、知識、分別などさえ、直接にヌースが述語づけられている例は寡聞のわれわれには見当らない。ヌースはむしろ特称語的傾向の強い言葉と評価すべきであろう。とすれば総称語として用いられた場合にも、プロネーシスの指しうる範囲を全部ふくむまでにはいかないだらう。恐らくヌースは意識のあらゆる段階を全てに亘って指す言葉ではないのである。

ところでいま(49頁末) 引用した如き論議は、プロネーシスに「意識一般」の意味があるのを利用した、形式的に一つの詭弁でしかなかった。初めからの争点はなにも、「意識されぬ快樂」などというものと「意識一般」との対立にあったのではなく、むしろ意識一般を共通の基盤とした上でのヘードネー族とやかざられたプロネーシス族との対立にあったのである。そしてヌースが総称的に指していたのも、かくかざられた意味でのプロネーシス族だったと考えられる。そこでこのまきにヌース族と呼ばれてしかるべき成員について一応調べてみよう。ピレボス篇ではその全体に亘って、結局、知性、やや狭義の分別、知識、真なる比量知、機智、術知、思惟、問答の力、

Waldenbauer'sche 眞なる臆見、記憶、諸々の徳が挙げられ、「その他」なる但し書が添えられている。問題はその他の内分けであろう。

そこでヘードネー族を手掛りに二三の推測を立ててみたい。この一族に最も普遍的な性質は、どの種類も全て随伴意識 *Stoffe* たることであろう。絶えずそのように語られている。快樂はそれだけでは何らのけじめもないものであり、何かに随伴してはじめて性格を持つもの (38a~3: 31a8~10)。そして何に随伴するかによって分類されるものなのである。とすればこれに対立するかぎりではヌース族は、全て主導的意識なのである。それは上掲の事例からも自明である。そこで実践的欲求 *Wohls* や恐怖 *Sorgs*、その他の没理的な感情など、全て随伴的にしか起らぬ意識は、ヌース族には入らないと解釈できるであろう。しかし知覚 *wissens* については、これも直接の言及が乏しいために大半は推測になるが、ともかくピレボス篇巻末の「善きもののランキング」において或る種の快樂が第五位に数えられ、この種の快樂は、知識あるいは知覚に随伴する類のものと語られている。従って少くともこの種の快樂を伴う主導的意識としての知覚 (視覚、聴覚、嗅覚 *Sehe, Höre, Rieche*) は、善きものの一つとして理想的生活の中に採用されていたわけである。とすればこの種の知覚は、ヌース族に読み込まれてしかるべきであろう (cf. *op. 55 e*)。さて以上をまとめると、言葉ヌースは、総称的には、特称の知性をはじめ或る種の知覚に至る種々の主導的な意識に共通なものを指すのである。むしろこの共通性は、特称の知性の基礎ともなるものではあるが。

B、特称語としてのヌース

a、認識欲の最高段階を指す例

われわれは既に、合成生活の素材としての快樂が分類厳選されたのを見て来た。それはまた快樂、分別の優劣評定という表立った目標のためにも、双方の全てをでなく精髄のみをとって比較するという方便に適うものであった。そこでこんどはピレボス篇第三部の後半 (35c4~59d9) における、プロネーシス族の分類である。それはここではヌ

ース及びエピステメーの族としてとりあげられ、分類の基準は快樂の場合 (cf. 58c7-d1, 53a2-b7. 註23) と同様、純粹 *καθαρόν* (55c7, 57b1-2, etc.) すなわち眞実 *ἀληθές* (58c-d, etc.) の度合であつて、その眞実さの基本的徵表は、明確 *σαφές* (56a, etc.)、正確 *ἀκριβές* (56b, etc.)、耐久性 *βέβαιον* (56a ff.) などにあつた。

ヌース・エピステーメー族は、まず製作術なる实用技術の類と、その基礎ともなり教育課題ともなる理論的知識とに分けられる。むしろ後者の方がより純粹である (cf. 55d, 57c-d)。次にこの分枝のそれぞれが同じ基準によって更に二分される。实用技術の類は、音楽の如くもつばら修練熟達にたよりいわずに、高度の正確さを期するもの (56b5, *ἀκρίβεια*) とに分けられ、他方理論知識の類は、例えば数学などで、これは、二匹二頭二羽二隊などの如き名数による応用数学の類 (56d10) と、不名数を扱う哲学者用の数学の類 (57d) とに分けられる。そして前者は先の建築術の類に大差はないとしても、後者、哲学者用の数学の方は格段に正確なものである。ところで以上の全てに較べて、明確、正確、耐久、純粹、眞実いすれの基準に照らしても更に遙かに優越しているのが、「問答の力」 *τὸν δυνάμειον δυνάμειον* (57e6) と呼ばれる力である。——「……問答の力は……在るものすなわち眞実にそして常に同一を保つて、在るものに関わり、いかなる知識にもまして最も眞実度の高い認識力である。……むしろいま問題にしているのは……そもそもいかなる知識が、かりに微小なものであり、またその裨益が「弁論術などに較べて」微々たるものであつても、ともかく明確なもの、正確なもの、最も眞実なもののみとどける知識であるかという、これである。……つまり何かわれわれの魂の中に、《眞実を本能的に恋慕い慕ふ》、そのためならば何でもしようという資質の力》が含まれているかどうかという点に注意をそそぎ、このような力を見つけ出し、その上で意見を述べるとしよう、そもそもこの力こそ、知性と分別を純粹なままに保有する公算の格別に大なるものとうべきか、あるいはこれよりも更に強力な力を他に何か探し求めねばならないのか。……「けれどもその答は自明である」何か別な知識なり術知

なりが、その力より以上に執拗に眞実アレイトリスに結びつくなどということには、同意し難いだろう。……「……〔これにひきかえ自然科学者達が心魂を傾けて研究しているのは〕常に在るものではなく、現在、未来、過去の時間のうちに生起するものである。……そのような対象は、いつかその最も正確な実相メタスタシスにおいて、明確メタスタシスになる〔などということの決してないものなのであって〕……このように何らの耐久性ペルマニエンスをも含まぬものを対象としながら、われわれの側に何ほどにもあれ耐久ペルマニエンスなものを生じることが、「どうしてありえようか」……そのような対象については、知性ノエシスもありえなければ、また最高ハイペリオンの眞実を含むいかなる知識グノシスもありえ〔ないだろう〕(37e6~39b9)」。さて再び吟味に帰ろう。

(1) まずここではヌースは、人間、特に哲学者の魂の中に活用されるものである。——(2) その対象は耐久ペルマニエンス的な存在存在であり、これはいわゆるイデアに他ならない。むしろ非感覺的、価値的であり、他者であろう。——(3) 作用作用については下(7)を参照。——(4) しかし状態状態については、《悲トラヒンい慕エロスう》*eros*なる表現になかんと注目すべきであろう。つまり問答ディアレクシクの力がエロース *eros* の一種と目されているのである。エロースはプラトンによれば欠乏ヘンケイと術策ポロイテの子であった (cf. *Smp.* 203b, c etc.)。従って問答ディアレクシクの力も、他のあらゆる認識力グノシスをいかに凌駕しながらも、エロース(認識欲グノシス)たるかぎりではなお自らも欠乏者であり、いまだ探究過程に留まるものなのである。しかし他方、いやしくもプラトンが不可知論を退け、すでに悉く知りつくしたといえるものが何時かはあると認めていたのであれば (cf. *Rep.* 508 e 517 c, etc.)、他に候補となるものがない以上、これもまた問答ディアレクシクの力力でなければならぬ。その場合にはしかし、それはもはや満ち足りたものであって認識欲グノシスではない。従って問答ディアレクシクの力には、認識欲グノシスである場合と満ち足りている場合 (cf. *Smp.* 204a)との両面を認めねばならないと考えられる。そしてこのことは、問答ディアレクシクの力の中に純粹に保有メタスタシスされているといわれる知性ノエシスについても、むしろそのまま認められねばならないことであろう。また、この知性ノエシスは、認識欲グノシスの一段階たるかぎりでは可能態にとどまるものである。——(5) 身体との関係については前例に同じ。——(6) またこ

の知性^{ノイズ}は、いかに他を凌駕しようとも可能態の側面を残しているかぎり、「絶対に真実なもの」ではまだありえない。——(7) ところでこの認識欲としての知性^{ノイズ}が他の諸知識^{エピステーメ}から区別される場合の基準たる真実度については、その徴表の主なもの、明確^{クリス}、正確^{アクリス}、耐久^{バウテイス}を暫く考察してみよう。まず明確^{クリス} *oakis* は「輝く」を意味する語根 *bha* を含み、元来「視覚的に明らかに表象されるもの」を指す。これはしかし、明晰^{ヘイリクシス} *eliktous* と同様、視覚的ニュアンスを含むという以外には、いまのわれわれにさほど啓蒙的とは思われなく、(cf. Hofmann, *Eym. W. G.*, 1950, p.307)。しかし耐久^{バウテイス} *bauros* の方は、もと明らかに心理外の領域において、例えば「大地の如くその上を何者が歩いても耐えうるもの、船筏の如く人が安んじて乗っておれるもの」などについて用いられ (cf. I. & S., *Pl. Phd.*, 85d3, *en: Baurotikon dymatos*)、そこからまた「時間的な耐久」の意味をも獲得した言葉である。この原義は客観的に理解できる。従って心理領域に関わる用例においても原義からの類推がきき、この言葉は理解され易いはずである。例えば演奏家は一定数比からなる音階^{ハルモニア}を予想しながらも、これを一々測定するのではなく勘によって弾くのだから、たまに一度くらいは的を射ることがあっても二度と同じことはくりかえし得ない。ゆえに彼の技術は耐久性が乏しいといわれ (cf. 56a4, 65a7)。また感覚物は刻一刻変化しつつあって耐久^{バウテイス}性を持たず、それゆえこれによって人の心に耐久^{バウテイス}的 (cf. 56a4, 65a7)。また感覚物は刻一刻変化しつつあって耐久^{バウテイス}性を持たず、それゆえこれによって人の心に耐久^{バウテイス}的な認識の生じるわけではないといわれる (cf. 39b, 前頁初め)。すなわちこの言葉は、心理領域に関しては「持続性、ないしは時間に沿った普遍性」を指すのであろう。従ってまた建築術^{テクノトキエ}が音楽^{ムシケ}以上に真^{アレテス}実^{クラテ}なのは、その測定器具^{メテラ}が勘や目測による以上の斉合性、恒常性を、つまり耐久^{バウテイス}性をめざしているからであり、不名数による数学が名数による数学に較べてより真^{アレテス}実^{クラテ}なのは、前者の方がより抽象的であり、より普遍妥当的であり、つまり耐久^{バウテイス}的だからなのであろう。ただし斉合性、抽象性は耐久^{バウテイス}性を含意するけれども、その逆は必ずしもいえない。——ところで正確^{アクリス} *akrobes* は、これも上記の同じ序列を追って、対象の斉合性、抽象性、普遍性が増すに依りて順次強調されるものではある。がしかし耐久^{バウテイス}とは必ずしも平行せず、正確^{アクリス}の方には反面、刻々に変化する感覚物、つまり非耐久^{バウテイス}につい

でも認められるむきがある (cf. 53 頁初)。のみならず既に建築術の測定器具なども、斉合性、恒常性に加えて緻密さ、個性判別をもめざしていたのである。とすれば具体的な種差や個別差を問う方向にも、正確さは認められねばならない。そしてそういう方向も含まれているからには、正確なる言葉は、元来個別と普遍、具体と抽象、斉合と不斉合などのいずれにも矛盾しないもつと単純な意味の言葉であつたとみなすべきなのである。語原原義について定説がないのでその単純な意味を積極的に説明することはできないが、ともあれ言葉真実に代るこの言葉がかく用途の広い単純な言葉であることには注目してよいと思う。

ところで問題は、問答の力ないしは知性が数学的諸知識を凌駕するといわれるその凌駕の質である。しかるにいまみられたかぎりでこれに積極的に答えてくれるものは、耐久という言葉のみらしい。けだし明確は主観的でしかなく、正確はいまのところ、真実の意味が斉合不斉合等々のいずれにも局限されえないものかもしれないという、消極的な可能性を開示してくれるに過ぎないからである。しかし耐久については、それが指していると目される「持続性」が徹底されれば、「永遠性」がえられる。そして「永遠性」は従来アイデアについて絶えず認められて来た最も重要な規定の一つなのだから、これがアイデアを知る知性にとつても本質的な規定となるというのは、むしろ必然であろう。とすればかの凌駕の質は、まずこの「持続性」の増大として受けとれるわけである。また次に、「持続性」は時間上のものであつて空間関係や論理的先後からは区別されうる。従つて仮りに空間や論理の關係に制約されない知識があるとすれば、そこでも「持続性」はなお問われうる。とすればかの凌駕についてもなお、空間や論理規則に制約されたものからされざるものへという心理作用の移りとしてそれを説明する道も残されてはいるのである。

またこれまでにみられた知性は意識の一段階であつた (上 49 ~ 50 頁)。しかしわれわれの日常的意識は永遠の相に立つものではない。従つてプラトンのいわゆるアイデアの認識は、われわれがふつう実感しうるかぎりでも最も持続的な意識に立つ認識欲としての知性から、永遠の意識に立つ満ち足りた知性への移行として理解されるだろう。

b、満ち足りた認識の最高段階を指す例

では最後に、ピレボス篇第二部に用いられている主題的なヌースを調べてみよう。そこには次のように語られている。「そもそもこのいわゆる全宇宙を支配しているのは、理路も弁駁もないで行き当りさんぼうな活力 (Tim. 47e 3ff, esp. 48 a 1 *dwlyen*) なのではなくて、むしろぼくらの先輩方が「知性こそが天地の王 (38 c 7) とか、知性ぞとこしえになべてをしろす (30 d 8) とか」いつている通り、知性ないしは何か格別優れた思慮とでもいふべきものがそれを秩序づけ舵取りしているのだ (38 de *baucowjeru*, etc.)。……〔その証拠には〕宇宙をみたまえ。そこには欠度も多量にあり限度も充分にあり、またその両者を蔽う合成因も悔り難いのがあって、その合成因は、年次や季節や月別けを秩序づけ配列する (30 c 6) 働きをなすがゆえに、智慧あるいは知性と呼ばれるに最もふさわしいものである (30 c 3-5)。しかるに智慧や知性は、魂なしには決して生じえない (30 c 9-10)。だからゼウス神みそなわすこの大自然の中にも、合成因の働きを介して、魂がそれも王者の魂があり、むしろ知性も王者の知性が生じているのだ。そして知性は、いわゆる万物の合成因の種族そのもの、またその一員でなければならぬ (30 d 10-31 a 8)。」

そこでこれもまた、前の例と同様に分析してみよう。

(1) ここでは人間のみならず全宇宙も知性を持つことが論証されている。そしてそれが王者のと呼ばれているからには、それ以上の知性はないのかもしれない。もっとも解釈によれば形而上領域にも知性があると推論されうる (下記 (5)、註 33)。しかもその結果一見矛盾してくるとみえる点は、この世の知識がかの世でみられたものの想起に他ならぬといふかの想起説 (cf. Men. 81c ff, Phd. 72e ff, Phdr. 299e ff) によつて、調整はできるだろう。——(2) とところで合成因たる知性の働きも基本的には恐らく認識なのであり、少くとも「際限、適量、適度、等しさ、二倍、法、紀律 (24 b 1-3; a7-b 1; c 3, 6; c 7; 26 d 9; 25 a 7 ~ b 1; 26 b 9 ~ 10)」など有限多数にある限度の類がその対象であったことは疑えないだろう。しかも限度の種族の本質はむしろ耐久性と善である。しかし他方「等しさ、二倍」などの例から

も自明の如く、少くとも多数なる限度が、一面において論理的数学的存在であることも否めない。天体の秩序をみよ。また、合成体については、そのいかなる種類にも合成因たる知性が内在的にみなぎっているはずなので、そこに自己認識がいわれているかとも疑われる。しかし認識の問題にあっては自他の区別は、場所や因果の観点からよりもむしろ、完全に熟知されるものとそうでないものとの区別として立てられるべきであろう(註26)。完全熟知については下記(4)に述べたい。——(3) また数学的存在をも対象としうる以上、この知性が矛盾律などを根幹とする論理的思惟を含むことは確かである。のみならず星の運行などの秩序が往々に知性の結果として語られるということは(Cf. Phd.97 c ff., Tim. 47 e ff.)、数学的論理的な思考が何時でも言葉ヌースによって指されうるといふ慣習によるものとしなければ、説明できないだろう。もつともこの知性の作用は論理的思考につきるのではないだろう。対象の耐久性や善の把握は論理的思惟を離れてもありうるとすれば。——(4) ところで状態に関しては、かの合成体がいずれも善き存在であったことに注目すべきであろう(上記45頁、註30)。例えばかの合成的生活は、同じく生活ではありながら、悪疫悪弊に禍される凡庸な生活に較べて人間の持ちうる最善のものであった。ということはすなわち、これを合成した知性が人間の知性としては申し分なきもの、知るべき限度を遺漏なく熟知したものだったことに他ならない。ともあれこのような知性は、先に述べた認識欲としての知性と同日に論じるわけにはいかない。しかしまた、逆に全く無内容な純粹可能態の知性もここに指摘されねばならない。というのは、合成体を寄って成す三要素、限度、欠度、合成因のうち最後のものは、合成体に対し内容的には何らの寄与もしていなかった。ことにそれぞれが単一にみられるかぎりでは、限度、合成因などは決して重なり合わず、合成因は単なる能動因でしかない。とすれば、ふつう充実した知識とみなされがちな知性が、限度の種族にはなくむしろ合成因の種族に入れられているということは、特に知性の可能態的側面が注目されていたためと考えねばならないだろう。さればここには全く無記の、純粹可能態の知性が語られているのであり、これを裏返せば完全熟知の純粹現実態の知性が可能とみられているわけである。

(5) また宇宙に内在する知性は空間的に制約されているので、それにもかかわらず超越的対象を認識しているのであれば、かの想起説によっていつかは自ら超越界にいったものとみなされてははずだろう。ここからして宇宙以上のレベルの知性も推説される。^{註33}——(6) またここに論じられている如き性知については、絶対的な真、あるいは可能態の面では完全に無記な知性が考えられる。^{註34}——(7) さて最後に「魂との関係を考察しておこう。ピレボス篇では一貫して知性は「魂の一状態であり(上43、49頁)、いまの箇所でも「知性は「魂なくしては生じえない」と語られている。魂」とその一状態との関係はむしろ空間的全体部分の関係ではなく、むしろ概念的なものであるが、ただしそれは道具に対する機能、あるいは可能態に対する現実態の関係ではない。何故なら「魂は道具ではなく、また知性は可能態の側面をも既に持っていたからである。しかしまた知性が道具なのでもないだろう。知性には現実態の側面も強く、知性自体が殆ど目的にもなりうるからである(註3、上53、57頁)。むしろ正しくはもっと平凡に字義通りに、「持つ者(主体)」と「持たれるもの(状態)」との関係にみてるべきであろう(上42頁、註5)。これは知性を超越界に移して考える場合にもむしろ同様である。ただし超越界には知性以上の内容を含む「魂」を想定しえないとしても、その場合には両者を同一者の二面とみなせば済むからである。^{註35}

四 ま と め

さて以上の調査は、一応の周匝をめざしながらも結局はかなり大まかな事実の跡づけのみに終わったようである。従って結論にも最早多言は要さないだろう。ともかく最後に、以上で摘発されたかぎりを予定に従って総覧し、それに基ずき言葉ヌースの語義の多少とも核心をつくと思われる素描を若干試みておきたい。

A、ピレボス篇における言葉ヌースの調査一覽

ス、素描

五九

用	対 象	所 属		徴表	
		用 別		用 別	
直知、抽象、判断、推論など未分化のまま総称 発見（探求ではなく） 論43末、44初 註10 論47半ば 註16	普遍的 知覚の直接対象と異なる 広義の自己 他者 価値対象 没価値対象 持続的対象	普通と個別 論43 論43 論43 論46初 論43 論46初	神 学者 成人一般 子供になし	主に現実態面を指す 主に可能態面を指す	論46頁末 註15 註7、9 註9 註9 註9 註9
	耐久的対象 論53半ば、註29 註55	イデア 論53半ば 同上 論53半ば 自己 論55 註29 他者 論53半ば註26 価値対象 論53半ば	哲学者 論52頁半ば	認識欲（エロース）を指す	
	超論理的側面を含む 論56	耐久的対象 論56末 註31 価値対象 論56末 自己 論57 註26 論理的秩序 論56末 [イデア] 論57-58 註33	[善き]人生 論56頁末 [善き]宇宙 論56末 [超越存在] 註33 56 57、58初	秩序因を指す	

区 別	真 偽	体 身	状 態	作
<p>持つ者と持たれるものとの関係 考察(スコペイン)、探究(ゼーティン)などの区別 知覚(アイステーシス)との区別</p>	<p>やゝ相対的ながら真</p>	<p>感官を用いず</p>	<p>現実態的側 論44 註11、17</p>	<p>○ 推論を指す例 価値、真偽の判断 持久性の自覚 論44 論43末 註17</p>
<p>魂(プシューケー)との関係 総称的ヌースの区別(プロネーシス)と 快樂(ヘードネー)、欲求(オレクシス)、恐怖(ポコス)など随伴的な意識に対して、主導的意識として区別される</p>	<p>数学なみに普遍的に真。絶対的に真ではない。まだ</p>	<p>同上</p>	<p>実践欲との区別 可能態的側面を含む 認識欲(エロース)</p>	<p>思惟法則に制約されぬこと 持久性の自覚 論55 註29</p>
<p>論51 註23</p>	<p>絶対的に真 「完全に無記」 論58初 註34</p>	<p>身体に内在するが、認識は制約されていない 論57―58 註33</p>	<p>満ち足りたもの 「純粹可能態の側面」 論57末 註34</p>	<p>論理的秩序を含む 論57、62 註32、37</p>

区

〔他の言葉に較べて美称的〕

註14、21

特称的ヌース

〔問答の力(デアレクテ
ー)との関係〕

論51末

論52、53

註27

〔知覚(アイステーシス)、
記憶(ムネーメー)、臆見

論51、62

註21、24

(ドクサ)、術知(テクネ
ー)、機智(シユネシス)、

註29、28

比量知(ロゴスモス)、数
学などの諸知識(エビス

テーマイ)などを、殊に
耐久性の長さにおいて凌

駕する〕

特に美称的

〔「」は解釈によるもの

註14、21

B、ヌース素描

この言葉は、まず基本的には「人間またはより優れた者(神や宇宙)の魂が、何ものかを知っているないしは知ろうと欲している状態の一段階であって、そのものを知るに際してその知ること自体のなるたけ長い耐久性が実感されるもの」を指すといえるだろう。次に一般的用法としては基本的用法を踏まえて「単純知覚を超えた認識または認識欲にかかわる、直知、抽象、判断、推論などの総括的美称」であり、これに対しピレポス篇での主題的用法においては、一般的用法を踏まえて「数学などの知識をしのご認識欲の最高段階」を指す場合と、「この認識欲が満足させられた完全熟知の段階」を指す場合とが認められるといえるだろう。

C、備考・提案

さて以上は、直接にはピレポス篇(前三五年前後プラトン七十歳あまりの作と推定される)にみられるヌース用語法であるが、それはまた当然、当時のアカデメイア一般に共通なものだったとも考えられる。例えば知性エピステイが知識

を超えるという関係の如きは、後のアリストテレスでは既に固定化して現われているが (cf. Anal. Post. 100 b8-9, etc.)、プラトンの国家篇ではまだ固定化していないらしく (cf. 533^a)、従って恐らくピレポス篇頃に固定化し始めたものと推定されるからである。^{註36}そしてその基本的用法には、K. v. Fritz (Cl. Phil. vol. 38, 40, 41) によってホメロス、ヘシオドスや、ソクラテス以前の哲学者達のうちに跡づけられたかの基本義「或る事態に気附くこと(註1)」が、そのまま保存されているわけであって、ただわれわれがいま特に「耐久性」の面からそれを描いたのは、この耐久性がかの基本義に含まれていたはずの転義可能性の主軸をなすものと、みとめられたからに他ならない。

察するに、例えばヌースが特に推論その他の合理的、思惟を指している用例などは、パルメニデスにまで遡られるものとはいえ (cf. Fr. B 2; K. v. Fritz, op. cit. ad loc.)、なお少くともプラトンの時代までは、ヌースのいわば転用例でしかなかったのであり、A. J. Festugière の解釈のように合理的認識をヌースの本義とし合理を超えた直知をプラトンによる転義とみなすことは、むしろ事実の転倒に近いといふべきであろう。合理的、思惟がとりわけヌースと呼ばれ易かったのは事実であるとしても、それは、それがこの言葉の基本義だったからというより、むしろそれが格別耐久的なものだったからに他ならないだろう。因みに、それとこの言葉との対応にさえ、いわれるほどの緊密さはプラトンでもまだみられず、かの合理的宇宙秩序の如きも、ポリチコス篇ではヌースならぬプロネーシスで呼ばれているのである。

(一)

註1 語原原義にはまた定説なく cf. J. B. Hofmann, *Elym. W. Gr.*, 1950, p. 219. となし Kurt von Fritz (Cl. philol. vol. 38, 1943 Apr., p. 79-93) の実証的調査によれば、ホメロスにおける動詞 *νοηίν νοεῖν* (名詞 *νοῦς* の古形 *νοῦς* *νοῦος* からの派生形) の基本義は「或る事態に気附くこと to realize a situation」。ホメロスが使った全 *νοηίν* の80%はこの意味を持ち、残る20%は、これに「意志 volition」のニュアンスが加わった派生義「企てるないしは意図する to plan or to have an intention」を持ち、原名詞 *νοῦς* の意味もほぼ同様という。ヌースの基本義が心理現象に関わるという点では今日もはや何人にも異存はなく cf. E. Boisacq, *Déym. gr.*, 1923, p. 672; K. v. Fritz, op. cit. p. 92. マナツサハツマン cf. Fr. B 12, etc. 等

トーン cf. Philb. 28e, Tim. 47 e ff., etc. $\nu\alpha\upsilon\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ 「世界秩序因 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ δ $\pi\acute{\alpha}\nu\tau\alpha$ $\delta\alpha\tau\alpha\sigma\theta\eta\acute{\iota}\omega\upsilon$ 」 $\nu\alpha\iota$ 基本
的に $\nu\alpha\iota$ の精神現象を指す $\nu\alpha\iota$ の解釋をなす cf. Burnet, E. G. P. 4 p 268, etc.

註 3 cf. K. v. Fritz, op. cit.; J. Beare, Gr. Theor. of Elem. Cogn. 1906 $\nu\alpha\iota$ に採用された実証の方法。

註 3 Philb. 篇にみられるヌース系諸語の内分け。たゞし代名詞や省略形によって暗示されたものは入れない。(1)ヌース直系諸

語 59 語 (括弧内は仮訳語 'underline は一般的用法)。①ヌース (知性 単数形) 主格 13e4 : 22c3 : 22d8 : 28c7 : 30c6 : 30c9 :
30d8 : 30d10 : 31a7 : 59b7 : 59d1 : 65c3 : 65d2 : 65e1 : 66e4 : 67a5 : 67a11 : —— 属格 21d6-7 : 22a3 : 22c8 : 23b7 : 55c5 :

58a4 : 58d6-7 : 65d9 : —— 与格 22e3 : 33c1 : 63e8 : 64c7-8 : 66e9 : —— 宾格 11b1 : 19b4-5 : 21b6 : 21d10 : 22c5-6 : 22d2 :

23a1 : 26c3 : 28a4 : 28c3 : 28d8 : 28e2-3 : 30d2 : 31d1 : 32e5 : 45d5 · 55b3-4 : 63c6 : 63c7 : 64a4-5 : 65b6 : 65c1 : 65d1 : 65e3

: 65e4 : 66b5-6 : —— ② $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ (知性 複数知性) 11b7 : 21a14 : 23e6 : 24e8 : 29b9 : 33b3-4 : 45c7 : 53b10 : 62a3 : —— $\nu\alpha\iota$

に中性名詞 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ (知性的にされたもの) 或 $\nu\alpha\iota$ は稀れた、知ること、知性的表象 cf. E. Schwyzer, G. G., 1939-

'33, I p. 128, 522-24, II p. 356; Hom. Od. 20, 346, etc.) 形容詞 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ (知性的に知ること) cf. Sommer,

Spr. gesch. Gr., 1927, p34, 96, etc.; Parm. Fr. B8, 8) 女性名詞 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ (知性的に知ること) cf. E. Schwyzer

op. cit. I p449, 504; Diog. Apol. Fr. 3, etc.) $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ Philb. 篇に用例がなく、この詳論はしない。その $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ の

語幹を含む直系派生語たる以上、他の史料からでも気附かれたかゝりは参考にするべきである。プラトンはこれらの言葉の使

う分けを、しばしば視覚関係の言葉に比しながら説明している。すなわち ①「眼珠 $\beta\upsilon\lambda\alpha$ 」に對して「魂 $\psi\upsilon\chi\eta$ 」魂の眼

に $\tau\eta\varsigma$ $\psi\upsilon\chi\eta\varsigma$ $\psi\upsilon\chi\eta\alpha$ 知的部分 $\tau\eta$ $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\tau\acute{\iota}\kappa\acute{\iota}\omega\varsigma$, cf. Rep. 508d, 533d, 439d] $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ ②「視力 $\delta\upsilon\lambda\alpha\varsigma$ 」に對して「未知 $\nu\omicron\sigma\varsigma$ 」知性作用

$\nu\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\tau\acute{\iota}\varsigma$, cf. Rep. 508a, 511d] $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ ③「視線 $\sigma\phi\alpha\gamma\iota\alpha$ 」に對して「知性的表象 觀念 $\psi\eta\gamma\iota\alpha$ 」 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ 知見 $\nu\omicron\sigma\varsigma$, cf. Parm. 132b, Phdr.

247d] $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ ④「対象物 $\iota\sigma\alpha\tau\eta\iota\varsigma$, $\tau\eta$ $\delta\iota\delta\omicron\mu\epsilon\lambda\alpha$ $\tau\eta$ $\nu\omicron\gamma\tau\acute{\iota}\varsigma$] に對して「知性的に知ること」 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\tau\eta$ $\nu\omicron\sigma\theta\eta\sigma\iota\alpha$, 知性表象 cf. R.

508a, etc.] $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ それぞれ對応している。——形容詞 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ (知性的受容能力の $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ cf. E. Schwyzer

op. cit. I p 497; A. N. Ammann, $\nu\omicron\sigma\varsigma$ bei Platon, 1953, p240 ff., 259 ff.) $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ に用例がなく。——⑤ヌース系合成

語 59 語。⑥ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\delta\iota\alpha\sigma\tau\alpha\sigma\theta\eta\acute{\iota}\omega\upsilon$ (眼睛 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 21d1 : 22c1-2 : 38e6-7 : 43a7-8 : 45c3-4 : 51b1-2 : 52e7 : 55d5 : 58d2

: 62a5 : 62d8 : —— ⑦カタノ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\kappa\alpha\tau\alpha\upsilon\sigma\tau\eta\iota$ (氣 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 18b2 : 18b6 : 18b9 : 26c5 : 35d8 : 40e8 : 48a10 : 51e4 : 51e6 : ——

⑧ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\epsilon\upsilon\psi\upsilon\alpha\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\epsilon\upsilon\psi\upsilon\sigma\tau\eta\iota$ (氣 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 17d6 : 20b7 : 32e3 : 57a6 : 58e4 : 59d4 : —— ⑨ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\sigma\upsilon\psi\upsilon\sigma\tau\eta\iota$ (理解 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 26c4 :

$\delta\upsilon\psi\upsilon\sigma\tau\eta\iota$, η , $\omicron\upsilon$, $\omega\varsigma$, $\delta\upsilon\psi\upsilon\sigma\tau\alpha\sigma\theta\eta\acute{\iota}\omega\upsilon$, (無 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 12d2 : 12d3 : 12d5 : 49b2 : —— ⑩ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$ $\sigma\upsilon\psi\upsilon\sigma\tau\eta\iota$ (理解 $\nu\alpha\iota\tau\acute{\iota}\varsigma$) 26c4 :

314: 44e2 :—(f) エピノエイン *ēpinoestē* (思ふつく) 65e5-6 :—これら合成語の意味は直系派生語の場合ほどには単純化されないもので、これらについても詳論は次の機会に譲る。underline した2語が、注意を惹く以外は、どの用例も一般用法のものでしかなう。

註4 初期の Chrm. 篇、後期の Plt. 篇など、ヌース直系語の主題的用例を全然含まぬ対話篇にも、一般用法のヌース、ノエイン、ノエーマなどは若干使われているし、他方主題的用法の顕著な例では、中期の Phd. 篇にヌース直系語計18語のうち13語(ヌース9、ノエイン1、ノエートス3)が、Rep. 篇第七巻には計25語のうち23語(ヌース2、ノエートス6、ノエーシス15)が、後期の Phlb. 篇では計65語のうち52語(ヌース48、ノエイン4)が、Tim. 篇では計42語のうち33語(ヌース22、ノエイン2、ノエートス6、ノエーシス3)が、それぞれ主題的に用いられている。

註5 この概念は慣用句のヌースにはつゝある。逆にいえば、ヌースが主体の位置におかれた表現「ヌースが万象を秩序づける cf. Phlb. 28e3」の如きは、一部哲学者の愛用語法ではあつたにせよ、一般の慣例には幾分をむき、奇抜なものであつたらう。cf. Tim. 34b-c、言葉の慣用からすれば身体が「シムホケー」を持つのだが、哲学的にいえばその逆であるところの説。これにヌースとつゞけざるは、——なお慣用句一般に「cf. E. R. Dodds, G. & Ir., p5 《even a façon de parler must have an origin》」。

註9 類例は cf. Emped. Fr. B110, 10; Arist. De An. 427b6-14, 429a5ff, Phys. 198a10ff, Met. 1074b20, etc.

註7 主張 *zetētēs* は知覚の直接対象にせよ cf. Phdr. 263a-c, Tht. 163b1-c5; N. Gulley (Cl. Qu. 1954, p194ff)

註8 類例は cf. Arist. De An. 429a4; 427b27, 433a10 「持統性 *ἐπιψύχου*」の有無に「*ἐν τῷ ἀρχοῦ*」の原初的思惟 *παρρατα(=πάρορα)* を知覚 *αἰσθησις* から區別してせよ。

註9 対象の性質が主観の性質を規制するところを考えた cf. Rep. 478c, 511e2-4, etc.; Arist. De An. 402^a1-2, Hicks ad loc., Met. 1074^b21-27, Ross ad loc., Top. 157^a8f, etc. 徒らに認識のしかるべき対象を論じた例は多し cf. Arist. De An. I, cap. 6^o 普遍に個別してつゞけ cf. ibid. 417^b2-23, 28^o、感覺物と非感覺物として cf. ibid. 432^a9-14; Pl. Tht. 184b ff. 自己に他者として cf. De An. 429^a26ff、価値対象と非価値対象として cf. ibid. 431^a9ff., Met. 1072^a30-31^o。

註10 作用の分類は Arist. De An. I, cap. 6 に従う。たゞし古代の一般ギリシヤ人たちが、かゝる心理分析をなしたなかたつて、つゞけざるは、cf. Hicks, ad Arist. De An. 402^a10-11. K. v. Fritz (op. cit. vol. 38, p90) はそれと「メノクスのノエインは、帰納推理、演繹推理を指すものではない。単純知覚よりは高級なるもの一種の mental perception... which

penetrates deeper into the nature of the objects perceived than the other senses を指すのでないことである。

註11 cf. Arist. De An. 412^a22-23, 429^b5~9; Pl. Tht. 197c ff. 「嗅覚の譬喩」。

註12 cf. K. v. Fritz op. cit. vol. 40, p. 226ff. キースの信憑性は古來往々にして疑われてゐるから。cf. Hom. Od. I. 3 各人各様なノオス Hesiod. Erga, 323 欺かれるノオス Parm. Fr. B6 ちかぬノオス Πλάτωνος Πλάτωνος Πλάτωνος なる。

註13 cf. Arist. De An. 429^a15~16, etc., Hicks De An. p. 177ff; Pl. Tht. 191c ff. 蟻塊譬喩 Philb. 38e12 ノートの譬喩 Tim. 50a-51a 香油基の譬喩。認識欲にこころは Pl. Symp. 203e-204c 「それは知を愛する者であるがゆえに、知者と無智者との中間にあるのでなければならぬ」

註14 cf. 動物や植物がキースを持つことに関する説 cf. Emped. Fr. B110, 10; cf. Sext. Emp. M. III286 「全つものが分別と知性を持つ」。これはそのまゝ一般人の考え方とはいふえぬが、しかしキースの一般的用語法に悖るものではないはず。例えば「眼れる」「かすかに」などを補つて解するべきものである。ソクラテス以前の哲学者たちやデモクリトスなどが知性と魂とを同一視したところ証言 cf. Arist. De An. 404^a28, Aetius, Doxogr. Gr. 391, VI, 5, 12 なども、むろん語義や用語法の同一視を伝えているのではなからぬ。「小児が持たぬキース」は、成人でも愚者には持ち得えないもの。これはキースを高級な精神作用とみる傾向の一端である。cf. Parm. Fr. B8, 50-51 「真理をめぐる信ずる知性 πικρὸν...ὀψίμα ἀμύρις ἀττὸς ἀς」
「死すべし者らの意見 δόξα...ποσειας」 Heracl. Fr. B40 「悟れざる者 νόον ἔχον」
「博學 πολυμαθῆν」の區別なる。

註15 cf. Men. 77c6ff.; J. Adam ad Rep. 382a5; K. v. Fritz, op. cit. vol. 38, p. 87; E. R. Dodds, op. cit. p. 17, n. 105; p. 20, n. 31.

註16 cf. Arist. Met. 983^a11 ff.

註17 主題的用法のものと同接近して用いられたためにそのヒュアノスに感染してしまつたような慣用的キース e.g. Phd. 97d7, Philb. 65d1 とも、主題的用法への挪揄にはなるが主題を論じたものとはいふえぬので、一般的用法のうちに数えて置いた。Philb. 篇の一般的用法の用例13語の諸徴表は殆ど共通であるが、対象の種別、またことに程度差の有無、状態などの点で多少の分類が成り立つ。すなわち既得知識(現実態)のヒュアノス強ちもの(得心がいくつように κατά δεῦρον τῷ)に並ぶ類、「少くともτῷ」などの限定詞を伴いがちなもの(11b1, 22c3, 26c3, 58a4, 65d1)と、認識能力(可能態)のヒュアノス強ちもの(「注意を払ふ προσέχειν τῷ νόῳ」)に並ぶ類、「τῷ νόῳ ἐκαστοῦ ἕκαστον ἰδύμενον」などの修飾語を伴うがちなもの(31d1-2, 32e5, 45d5)との対照。たゞし動詞ノエインでは明別はしてゐる。また 29b9 のノエインは明らかに「推論」を指してゐる。

註 18 ヘードネー族プロネシス族の対照が多少とも明瞭とみられる約 80箇所のうち、列挙体 19、単独のヌースが総称語である場合 23、同じくプロネシスの場合 31。

註 19 $\nu\upsilon\phi\varsigma$ の genus analogum, $\tau\acute{\alpha}$ $\tau\acute{\alpha}$ $\iota\phi\sigma\epsilon\tilde{\iota}\nu\varsigma$ $\lambda\epsilon\gamma\eta\mu\epsilon\nu\alpha$ はあれは単一な定義は与えられないこと、素描 identifier は可能 cf. Arist. Met. 1005^a11, Tricot, Met. I. p. 175ff.; De An. 402^b5ff, Hicks ad loc.

註 20 上註 19 参照。

註 21 蒸気船全体は部分の名「蒸気」で表わしえても、同じ全体の他の部分、例えば船橋は「蒸気」とは呼べない。この種の言葉では特称語的傾向が強いのと考えられる。ヌースもそれらしい。これに対し、「全てのエビステメーを尊重するあまりに Phil. 62d9-10 $\delta\iota\alpha$ $\tau\acute{\alpha}$ $\pi\alpha\sigma\alpha\upsilon$ $\alpha\gamma\alpha\tau\alpha$ $\epsilon\pi\iota\sigma\tau\eta\mu\eta\upsilon$ 」は、知性^ノは極めて脆く不純な術知 62b5-9 までが「エビステメー」と呼ばれた総称の例。同様に 55c5, 66c5 (pl.)。プロネシスの同様な例は 21b6-9, 61d1, 63a9, 63b2-c4。これらには、往々に複数形で、あるいは複数を示す形容詞「全ての」などを伴って使われているのが特徴的。しかしヌースには複数形の例を殆どみならず (Pl. Grig. 510b9-c1 $\xi\varsigma$ $\alpha\tau\alpha\upsilon\tau\omicron\varsigma$ $\tau\omega\upsilon$ $\nu\omega\varsigma$ は複数を意味せず、Arist. Met. 992^a30 $\pi\acute{\alpha}\delta\varsigma$ $\nu\omega\delta\varsigma$ は「知識の種々」を指す例ではならず cf. Alex. Aphr. ad loc. p121, 15~16) かつ、むしろ古来ヌースの用語法は K. v. Fritz (op. cit. vol. 41, p27) の説に反し、プラトン以上に拡大して用いられるべきであらう。むしろ古来ヌースは、他種の心理名称と列挙される場合には必ずしも上位の心理状態を指す傾向があったらしく (上註 10、11)、またプラトンはそれが殊に著しく。e. g. 「可視界 $\phi\alpha\epsilon\tau\omicron\varsigma$ $\tau\acute{\epsilon}\tau\tau\omicron\varsigma$ 」を超える「可知界 $\nu\omicron\gamma\eta\tau\omicron\varsigma$ $\tau\acute{\epsilon}\tau\tau\omicron\varsigma$ 」Rep. 508^a 「比量知 $\delta\epsilon$ $\nu\omicron\alpha\alpha$ 」を超える「直知 $\nu\omicron\gamma\eta\tau\omicron\varsigma$ 」Rep. 511^e 「知識^ノ術知^ノ」正しく「意見」を超える「知性」Tim. 51d^e など Phdr. 241a, Phil. 59c, 59d1, 65b-e, など。ちなみさ下位の心理状態が彼によってヌースと呼ばれる可能性は、それだけ薄かったのはあるまいか。* なる Aristoph. Fr. 471 の複数形は戯文らう。

他方プロネシスはじじじ「原初意識一般」を指しえたらしく。その語根の原義は不明であるが (* $\phi\eta\eta$, Schwyzzer op. cit. I. p. 569^a; J. B. Hofmann op. cit. 1950, p. 404) 同根のプローン $\phi\eta\eta$ (これは前 390 年以後は、擬古文以外では使われなくなつた) cf. K. v. Fritz, op. cit. vol. 40, p. 229) にせ「肺臓または横隔膜」を意味する場合もあつて「生理的情動のニムフ」を伴うことが多い (e. g. Hom. II. 11, 89. 空腹を感じる器音としてなど)。とすればこれによって代つた同根のプロネシスにも、当然没理的情動を指す機能が予想されてよいだろう。むしろプラトンはこの言葉がしばしば叡智 $\sigma\omega\phi\iota\alpha$ に匹敵す

る高等精神を指してなり (cf. Phd. 62d4, 69b3, Burnet ad loc., Phib. 28d8-30 e6, 59d1), K. v. Fritz, *ibid.* p. 17. プロネーションの盲目的情意 *θυμὸς* に対し常に知的感情 *intellectual emotion* を指していることと解釈している。なほ cf. L. & S. *epibymos*。しかし知的側面だけでこれらの言葉の全て或いはその基本を尽すことはできないだろう。アリストテレスの後期では「周知の通りプロネーションは観想知に對置され」「人生の具体的な幸不幸に関わる実践知 cf. Eth. Nic. 1140^a4~6, 20~21」を指すものとなっているが、これもむしろ W. Jaeger (Aristoteles, 1922, p. 67ff., esp. p. 83-4) の認めた如く「プロネーション以前のプロネーションに「没理的情動」の意味があつて、それが基本的に繼承されたものと解釈すべきであろうし、従つてまた「この没理的側面の伝統はプラトンにも保たれていたとみるべきであらう。cf. R. B. Onians, O. E. Th., p. 14f., 23ff. etc.

なおプラトンでもプロネーションとヌースとの間に、「アリストテレス後期の実践知對観想知の區別に似た使い分けが跡づけられる。すなわち一方ヌースは実利の点で弁論術に劣るかもしれないと語られており cf. Phib. 58a7~d4, 62a, b、他方ヘドネ一族に對立する倫理的概念としてはヌースよりもプロネーションが前面に出る傾向がある。この両族が對照的に取りあげられる phib. 篇第一節初頭では「もはやプロネーションが代表語であつて、ヌースの方はやゝ後からひしかなう。cf. 21d6, Hecht. Exam. of Pleasure, p. 12' 上註 18 参照。

註 22 cf. 117^b-8, 13a-e, 19d4-5, 21b6-7, 55b3-4, 57e6-7, 62a5.

註 23 まづ意識以前の生理的変化 *πάθος* (cf. 61d9, 33d2ff. Th. 186e2) に直接随伴するプリミティブな意識としての快楽がある (21d, etc. (上 45 頁末参照)。これはプリミティブな知覚と區別できなく。次に知覚、記憶、知識、他の快苦などに随伴する快楽がある。これらは悪徳、無智、無分別、偽なる臆見などに随伴する不純なもの 63e8; 12d2-3; 63e7; 12d3 等) 諸徳、分別、知識、真なる臆見、記憶、視聽嗅覚などにそれぞれ随伴する純粋なもの 12d1-2; 63e5; 15e1; 12d4; 66e5; 33ef; 66c6; cf. 51bf などに分けられる。理想的生活にとり入れられるのは最後の部類のみである cf. 51af, 66c4-7, 52c6-d1, 62ef, 63e3-e7。

註 24 Phib. 篇のマーヴ cf. 14b1-4, 22d4ff., 27c, 44d2-5, 47c, 52d10-e4, 55c6-10, 57a10-b2, 59d7-9, 61e6-9, 62d8-9, 64c5-d2, 上 44', 45', 47', 48 頁参照。

註 25 特稱語知識は知性についても述語づけられる。上註 21', 上 48 頁参照。しかし特稱語知識は不可、下 61—62 頁参照。

註 26 「哲学者の知性にとって対象は他者である」というのは「プラトンのアイデアを「人間が懐く概念 notions なしは論理的思惟法則 das Logische とみなす立場 cf. Lutoslawski, O. G. P. L., 1897, p. 422, etc.; P. Natorp, Über P. I. L., 1925,

p16, etc. に反対して、人間の知性を超えてあるものと認めることに他ならぬ。しかしこの種の超越をプラトンのイデアに帰するための典拠としては、しばしば引合に出られる如き「イデアをキチンとこじ見せ cf. Men. 71c, Phd. 83b, Smp. 210eff., Rep. 476b, 540a, Tim. 28c, 39e7.」など、「イデアと触れぬ cf. Tim. 37a-c, etc.」などの「うかたも対象の外在を示し易く知覚語 (cf. Arist. Mem. 450^a30-32; De An. 424^a17-24; 425^b23)」による表現を指懸するもの (cf. Adam, Rep. II, p168-171, Cornf. Pl. & Parm. p. 92ff., Hackf. op. cit. p. 123-124) には不充足である。かような譬喩はうかたのこ解せられるか。因みにこれら知覚語による譬喩は、うかた本来の Festugière op. cit. p. 5. 233, etc. 及び F. A. Wilford, Phron. 1959. 1. を認めている通り、イデア認識の intuitive な性格を表現したものとみるべきであろう。知性からの超越のより充分な典拠は、むしろ次項(4)53頁に示すことと「知性の不充足な」「認識欲としての知性」に求められるべきであろう。いまだ知りつくされていない対象こそ必然的に他者である。なお Phlb. 篇には同年頃の筆 Epist. VII. 342c4-d3 を参照。

註 27 「問答の力」は最高認識を含む (Phlb. 58d-e, cf. Rep. 532b, 534e-535a)。うかたのイデアの道 (cf. Rep. 511b-d) は、むしろ入既に認識欲ではない、むしろ A. J. Festugière (C. V. C. P. 2 1950, p187, cf. 189, etc.) による expliciter toute la richesse de ce contact initial en rattachant à l'Un l'ordre entier des essences によるべきものである。ただし注意、われわれのこの論は、「問答の力」のいわば形式的方法論的側面ではなく、むしろその本質面、自覚体験の面に関わる。周知の如くプラトンの「問答の力」は「アリストテレス (cf. Soph. El. 165^a38, Top. 100^a18-21, 105^b31, Met. 1004^a17-26) やストア派 (cf. SVF. II 49, D. L. VII 41) などによって「形式的側面から継承され、この側面は新プラトン派にも「弁証知が形式論理を超えつゝなお従うべき道程 (Plot. I 3, 85, 12) 規範 (ibid. 85, 17) としつゝ「保持せられつゝ (ibid. 84, 9ff., 85, 3, etc.)」そこでこの側面のみ注目するならば、これは言葉によつて伝授可能な側面でもあるから、人はプロテノスが好んで語る「伝授可能段階の区別 (VI 9, 84, 26, etc., cf. ノクラーテス産婆術の譬喩 Pl. Thrt. 150b, 160e, etc.)」をこゝに適用して「善い者への道程の中に、弁証知を超えたより上位の或る伝授不可の過程を期待しうららう。しかしこれは誤りとはいへ切れぬにても充分ではない。問答の力には、数学的諸知識と境を接するその最低段階から既に伝授不可の面 (下註 28、耐久性の自覚) が含まれている。否、むしろこの面こそ弁証知の本質面であつて、形式的側面は重要ではあるが結局手段でしかなく (Plot. I 3, 85, 18ff., 22)。形式的知識の彼方にもなお問答の力があるのであり、またこれを陵ぐ力は他にない」という Phlb. 篇 58d-e の言葉こそ字義通りに解されるべきであろう。プロテノスもこの箇所を引いて次のように述べている。「弁証知は、一旦發生するところでは自らが完全知性的の状態に至りつくまで、その原因から帰結する諸々のものを綜合、結合、分割などとしていく。とい

うのは、「プラトン」によればこの弁証知は「知性と分別との最も純粹なもの」なのだから。……すなわち分別たるかぎりにおいては実在に、知性たるかぎりにおいては実在の彼方に超越した尊きものに、関わりかねばならぬ(Plot. I 385, 4~8)』

註 28 「正確」を仮訳。語原には「定説なり」(cf. H. Frisk, Gr. Etym. 1954, ἀρετή, s.v.)。E. Schwyzler (Glotta, 12, 12, 1923) が Boisacq, Walde (v. Boisacq, D. Eym.) など「その語根は ἀρετο-」頂点を認め、「或る限界への接近」の意味を説くところとする。また普通化、個別化いずれの方向にでもなく、むしろ單純に「ありのまま」を指していると思われる用例がある (cf. Thuc. I, 22, 1-2; 97, 2; 99, 1)。

註 29 耐久性がプラトンのイデアの特質なることは、「イデア即ち永遠の感覺物 *αἰδιότητα αἰδία*」と云うアリストテレスの批評からも覗かれる (cf. Met. 997^b5-8, etc.)。むしろアリストテレスでは、恒星天や数学の対象など「永遠」と呼ばれてはいる (cf. Met. 987^b14-18, 991^a10, etc.)。しかし眞に永遠なるものはイデアであり、またなかならず永遠性においてこそイデアは他と存在に区別される (cf. Pl. Tim. 50c4ff, Black Phd. ed. p191n2)。「永遠性」は W. D. Ross (ad Met. 997^b12) のように *only one way out of several of describing their (i. e. of Forms) nature に過ぎぬ* とはせず、むしろ A. J. Festugière (C. V. C. P. p257 ff, etc.) の認める通り、*Elle (i. e. l'Idée) possède, pour attribut essentiel, l'éternité* である。人間の魂の最高部分なごしは知性が求めてまなごうのも耐久性、永遠性である (cf. Pl. Plt. 309c1 ff; Men. 98a-b, Tim. 90b6-c)。なお田中教授の次の一節も参照されたい。「ひとは普通といふと、何かすぐに空間的なものを考へ、甚だしい場合には、歴史地理的な空間だけを考へたりするのであるが、それはむしろ時間的なものである。少くとも帰納法の基礎に考へられる普通は多分に時間的なのである。「すべて」は「いつも」と同じであり、普通は常住の同意語であると言つてもいゝかも知れない。あるいはしかし、それはむしろ超時間と呼ばれるかも知れない。実質的時間は過去だけであつて、かゝる時間からの超出が普通となるからである(ロクスンイデマ p. 305-306)」。なお cf. Arist. met. 1005b 11-13, 19 ff.——また制約される知の超出について cf. Festug. op. cit. p262 etc.; Wilford op. cit. p. 54-58. ——また持続性の実感とは「ものごとの認識と同時に起る純粹な自覚に他ならぬ」。結果的には Descartes の *évident* に「また恐らく Bergson の *durée* に類似するものと考へられる。そして多分 *éternité de mort* と同一視されるべきはなごうである。またこれは Festug. op. cit. p. 220-221 の論法に従えば、「プラトン」哲学を *une mystique* とみなすための一論拠となる。

註 30 上 45 頁でも便宜上、後の論旨を先取してかく訳しておいた。Hackf. op. cit. pá6n1 に従ひ、こゝに善を読みとる。

註 31 cf. 24d4, d5, 25d11-e1.

註 32 下 22 頁、下註 37 参照。cf. Pl. Rep. 531b1, etc.

註 33 Phib. 篇 23c1-31b1 に超越存在を説くところについては論議が喧しい。cf. Boussoula, L'Etre et la Compos. des

Mixtes d. l. Phib. d. Pl. 1952 p. 175 ff. 註 註 1 覽。大勢は可能視してゐるが論據は充分でない。Phib. 30c10, etc. cf. (Hackt.

op. cit. p. 57.) の「*ἡσὺν ἰσχυρόθυον*」を主題的用語とは思われない。なお cf. Hackt. op. cit. p. 37 ff.

註 34 すなわち身体的要素を中略も含めること。知覚その他が完全認識に至り得ないのは、自らが既に身体的性質を帯び有記化

しているのである。cf. Arist. De An. 418^b26ff., Theophr. De Sens. 827ff., cf. Arist. Met 1074^b29.

註 35 cf. Arist. De An. 413^a13 ff., 429a11。気性即ち道具と解決たるものが往々にして明瞭な典拠をヒトマンと見出せる。

op. cit. p. 105ff.; K. v. Fritze, op. cit. vol. 40, p. 229) を「むねわたるな事聞こしてまた明確な典拠をヒトマンと見出せる」。

上註を参照。

註 36 アリストテレスによる用法拡張については上註 21。

註 37 Festug. Personal Religion among the Greeks, 1954, p. 45, 128 注。マースの本義は《the faculty of intellectual perception

by which we apprehend a definite essence》となつて、次にこれが非感覺であるところから《negative》な性格を機縁として、

更に非感覺的な《the faculty of mystical intuition by which we enter into contact with the Being who is beyond essence》

を指すように、この言葉がヒトマンによつて転用されたこと。

(筆者 京都大学文学部〔西洋古典文学〕臨時教務員)

inner and outer. Ideas are given to mind by sensation and reflection, and reason then using such given ideas, composes knowledge. The process corresponds to the methodical procedure taken in modern natural science, i.e. analytical-synthetical procedure. Knowledge means the analysis of object into ideas and the reconstruction of it by mind using ideas as the materials. Accordingly knowledge pertains to nothing but the ideas of objects, and not objects themselves. Here lies his representationalism. By means of ideas objects, inner and outer, are made objects of our mind.

The so-called empiricism of Locke is empiricism, so long as we only notice his start with ideas by sensation, but in truth sense data are rationalized through ideas and then are given to reason so as to be composed into knowledge. The Cartésian tendency remains in his system, especially in the Book 4 of the Essay. It shows his thorough-going confidence in reason and the method of mathematics.

* For the Japanese original of this article, see Vol. XLI, No. 5 & 6.

Remarque sur la dérivation des sens du mot $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ chez Platon.

par Koichi Nagasaka

Par ce mot $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ chez Platon on entend d'ordinaire l'un ou l'autre des deux modes d'appréhension suprasensible, «intellection rationnelle» ou «intuition mystique». Et selon le Prof. Festugière, ce mot signifiait au sens propre le premier mode, et puis au sens figuré, le second. Ce mot acquit ce dernier sens «intuition», pour la première fois chez Platon, seulement à cause du fait que tous deux sens sont négatifs, c'est-à-dire non-sensibles. Pareille opinion, cependant, quoiqu'elle soit claire, nous semble être un peu trop dépendante des terminologies post-platoniciennes.

Nous nous sommes efforcés—en nous bornant aux données textuelles de Platon et aussi aux investigations exhaustives par M. K. v. Fritz sur ce mot $\nu\omicron\upsilon\varsigma$ dans Homère et les pré-socratiques —d'abord de recueillir les traits les plus souvent trouvés dans les usages platoniciennes du mot, et puis, de reconstruire avec ces traits son sens propre chez Platon, et enfin, d'en faire dériver les sens secondaires, au moyen de la comparaison des

traits entre eux. Et ainsi nous sommes arrivés à cette conclusion remarquable : «une stabilité le long du temps, *βεβαιότης*» c'est ce qu'on devrait pour un des traits les plus importants chez Platon.

Nous pourrions à la suite proposer quelques hypothèses. D'abord ce serait de cette «stabilité» plutôt que de la «suprasensibilité» qu'on devrait faire dériver les sens figurés, contrairement à ce qu'a soutenu le Prof. Festugière. Aussi le fait qu'un Grec dénommait par ce mot *νοῦς* ce qu'on appelle de nos jours «intellect», ce ne serait point parceque ce mot *νοῦς* aurait impliqué foncièrement la “rationalité” (cohérence en espace—trait central de l’“intellection” de nos jours), mais plutôt parcequ'il se serait basé sur le fait que l'«intellection» est stable (stable le long du temps), tout en l'étant moins que l'«intuition mystique». De plus si ce mot *νοῦς* pouvait désigner d'après Platon tous les modes d'appréhension cognitive qui présentent le caractère de stabilité, ce serait parceque ces appréhensions étaient pour lui moins oppsées entre elles que le sont de nos jours l'«intellection» et l'«intuition».